

# 「リケジョ」どう増やす

理系女子「リケジョ」を増やし、活躍の場を広げようと「女性研究者支援」をテーマにした国際シンポジウムが東京都内で開かれた。海外の女性研究者が現状と課題を報告。社会の意識改革や支援プログラムの整備を求める意見が多かった。

(折尾敏)

## 女性研究者支援のシンポ

「世の中の半分は女性」九年度科学技術振興調査。日本の人口は減少、整備の女性研究者支援割合が減少。女性の教員、若者も減って、モデル育成事業に同大の女性研究者の比率は19%。女性の力がないとの懸念が採択された。国を挙げ、〇九年九月にも同じ傾向にある国際シンポジウムを主催。女性研究者支援を聞いた東京都市大(東京)・世田谷)の中村英夫。各学科への女性教員採用や相談活動、産休・育休取得者への研究系武蔵工大が母体で業務支援をしている。女子学生、女性研究者三年間の事業の間、間まが少なく、男社会の風と、海外から女性研究者を招き、シンポジウムの中で、女性研究者が評価される機会を増やし、男女共同参画の実現につなげようとした。

【海外では】 ニュージーランド・カンタベリー大のゲイ。文部科学省の二〇〇八年版科学技術白書から。ポルトガル、ギリシャ、スペイン、米国、アイルランド、ノルウェー、イタリア、フランス、スイス、ドイツ、韓国。



ル・ギロン副学長は「国内の大学で講師は男女比が同じだが、上級職になるにつれて割合が減少。女性の教員、准教授の比率は19%にとどまる。国際的にも同じ傾向にある」の採用だけでなく、上級職への積極採用が必須」と強調する。



女性研究者支援について話し合う海外の女性科学者や専門家。東京都市大で。

## 家庭と両立 難しく 「イクメン」増やすのが先?

●記者のつぶやき  
日本人のノーベル賞受賞者は今年の化学賞一人を含め十八人。女性はいない。科学技術立国を目指すなら、女子力が不可欠。リケジョが将来、リーダーになれる環境づくりが大切だ。そのためなら喜んでイクメンに!

東京都市大環境情報学部の小畑洋美教授は、集めた三回会報を出し「家庭と仕事の両立が難しい。家事も育児もコミュニケーション技術も、研究を続けたりして、人材育成や研究の質を上げていく」と報告。勤務時間や保育施設、時間の弾力化や保育施設、研究の充実とともに重要な課題が「夫の協力」。ギロンさんとリッチモンドさんは「夫が研究活動をサポートしてくれた」と振り返る。ギロンさんは「子育てに参加する男など周囲の支援態勢」が「イクメン」で、今年二月から四月にかけて「適切な助言をする」として育児休暇を取った文部科学省技術政策研究所企画課の牧慎一郎課長は「女性研究者が活躍するためには配偶者の協力が必要。男の育児取得は簡単ではないが、みんなが取っていかないと世の中は変わらない」と話す。